

## 教育プログラムの概要及び採択理由

機 関 名	横浜国立大学	申請分野(系)	人社系
教育プログラムの名称	経済・工学連携による金融プログラム		
主たる研究科・専攻名	国際社会科学研究科経済学専攻・グローバル経済専攻		
(他の大学と共同申請する場合の大学名、研究科・専攻名)			
取組実施担当者	(代表者) 小林正人		

### [教育プログラムの概要]

ファイナンス分野は、アメリカ等においては実務とアカデミックな世界の交流が非常に盛んであり、多くの博士号取得者が企業の第一線で実務に携わっている。近年の日本においても、金融市場の自由化・国際化につれ、**博士号取得者がファイナンスの実務の現場で活躍**するようになってきている。当該分野は、ミクロ経済学・計量経済学・ファイナンス理論などの社会科学分野、確率過程などの数学、コンピュータを用いて数値計算や理論的モデルのシミュレーションを行う計算科学など、幅広い分野に関する知識が要求される分野となっており、**本質的な意味での学際的教育の必要性**が最も高い分野である。それに加えて、上述の学術的知識を有効に活用するためには、金融商品開発・資産運用・リスク管理等における経験が必要不可欠であり、大学の研究者と同じレベルの高度なアカデミックな能力と**実践性**が、実務の場においてともに必要とされるようになってきている。

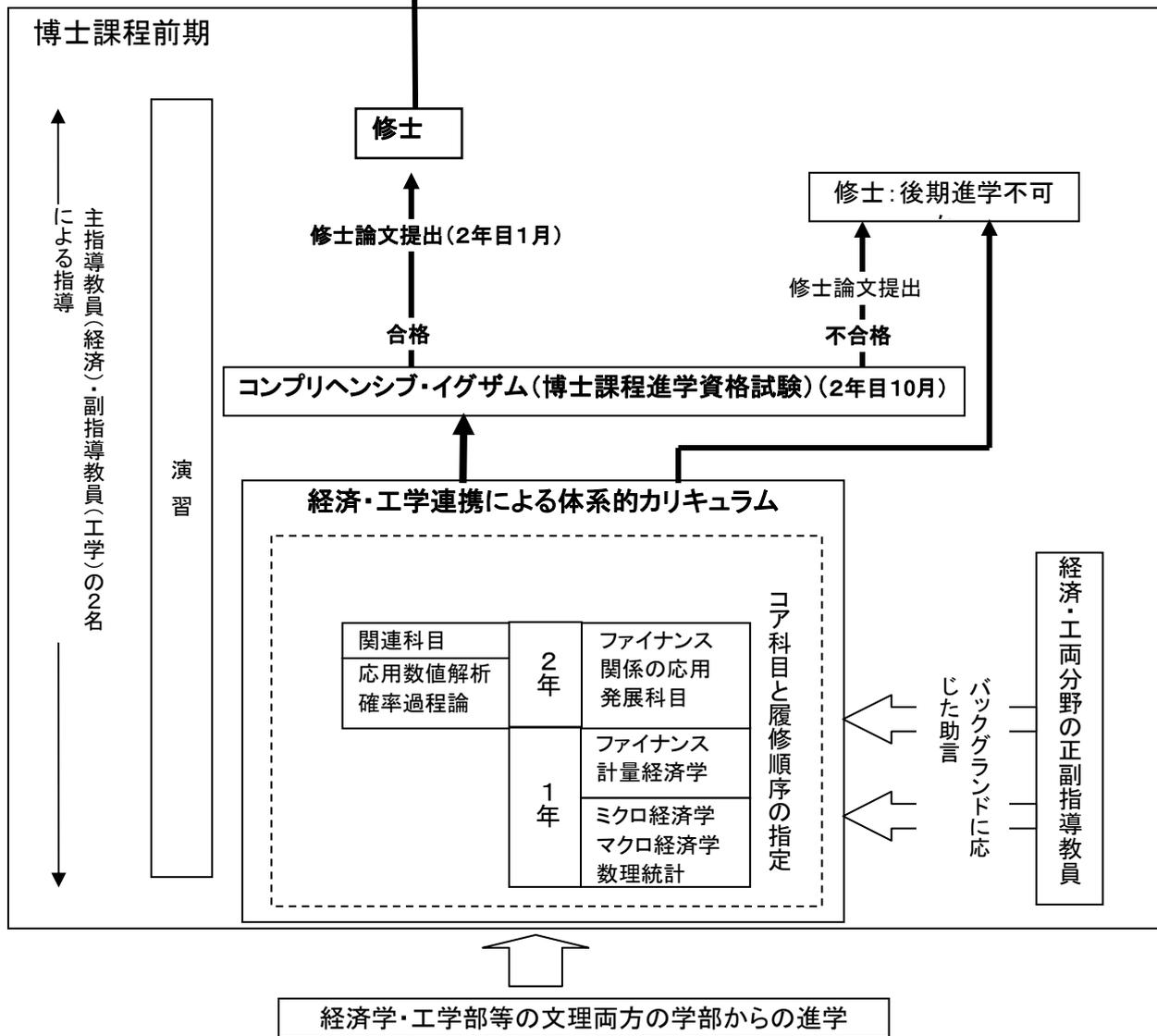
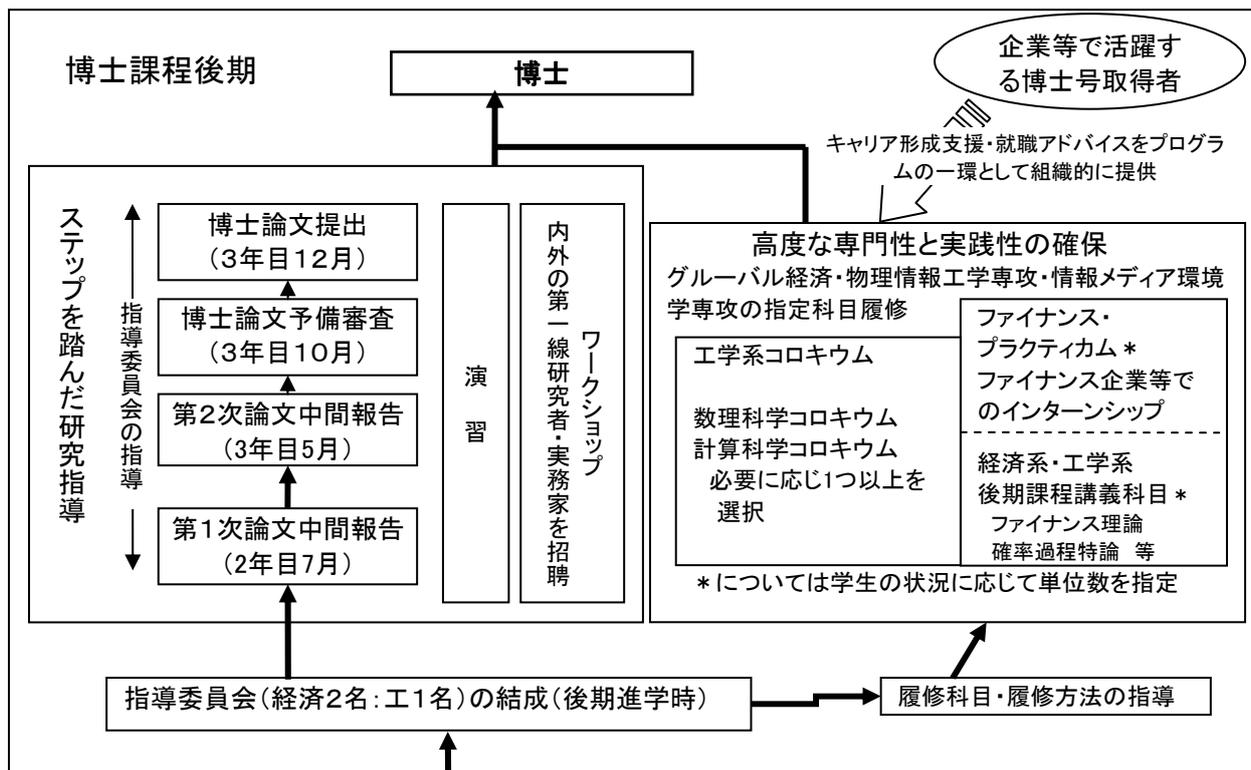
本プログラムは、**経済学の主専攻と工学の副専攻**の組み合わせによって、企業等における金融の第一線の現場において必要とされている**経済学・数学・計算科学の知識を兼ね備えた実践性ある人材**を育成する教育プログラムである。**学内競争的資金である学長裁量経費の助成を受けた文理融合ファイナンス研究教育プロジェクトの経験**を生かし、国際社会科学研究科・工学府・環境情報学府の協力により、高いスキルと実践的な能力を備えたファイナンス専門家の養成を目指す。

この分野には、社会科学系・工学・理学系などの多様な学部出身者が携わるようになってきていることを考慮して、文理両方の学部出身者を積極的に受け入れる。博士課程前期においては、経済系・工学系各1名からなる**正・副2名の指導教員**が院生を指導に当たるとともに、国際社会科学研究科経済学専攻によって提供されるミクロ経済学・計量経済学・ファイナンス等、工学府物理情報工学専攻・環境情報学府情報メディア環境学専攻から提供される確率論などの数学、数値計算などの計算科学などからなる**体系的なコアカリキュラム**が提供される。博士課程前期から後期への進学については、**コンプリヘンシブ・イグザム(後期進学資格試験)**により、ファイナンス分野で必要とされる幅広い分野の知識をチェックするシステムを導入する。

博士課程後期においては、経済系2名・工学系1名からなる**指導委員会**による院生の**段階的な論文執筆指導システム**(第1次・第2次中間報告、予備審査)、経済系・工学系の講義および海外を含む第一線の研究者・実務家を招いた**ワークショップ**(集中セミナーも含む)に加えて、**数理科学コロキウム・計算科学コロキウム**への参加、ファイナンス関係の企業等でのインターンシップである**ファイナンス・プラクティカム**からなる教育システムを導入する。この教育システムにより、アカデミックな教育研究と実務とのフィードバックを実現し、高いアカデミックなスキルと実践性を兼ね備えた人材を育成する。

純粋なスキルと実践的な能力の育成に加えて、博士課程後期院生の**キャリア形成支援**にも力を入れる。ファイナンス・プラクティカムおよび実務家を招いたワークショップに加えて、金融工学研究所、ニッセイ基礎研、大和SMB Cなどのファイナンス関連企業等で活躍している国際社会科学研究科の博士号取得者による院生向けの**キャリア形成セミナー・就職相談等**を組織的に提供することにより、博士号取得者が実務の場での活躍できるように支援を行う。

履修プロセスの概念図(履修指導及び研究指導のプロセスについて全体像と特徴がわかるように図示してください。)



<採択理由>

大学院教育の実質化の面では、「経済学、数学、計算科学の知識を兼ね備えた実践性ある人材」を育成するという人材養成目的が焦点化されており、文理融合型の教育研究体制が整備されている点は評価できる。

教育プログラムについては、博士前期課程では、経済系・数学系からなる2名の指導教員による指導の下、体系的なコアカリキュラムが提供され、博士後期課程進学の際には、コンプリヘンシブ・イグザム（後期進学資格試験）による厳正な評価制度が導入されている点は評価できる。また、博士後期課程学生へのキャリア形成セミナー、就職相談等を組織的に提供するなどの工夫も見られるが、後期課程の論文作成に当たってのコロキウム等の内容については、更に検討することが望まれる。